

報徳博物館

友の会 だより
No.73

第17回友の会見学ツアー

みくりや

御厨地地方の報徳群像の跡を訪ねる



天保4年(1833)から始まった凶作は、全国的な大飢饉となり人々は大変困窮しました。特に天保7・8年は深刻なものでしたが、小田原藩も例外ではありませんでした。藩主大久保忠真に桜町から呼び戻された二宮尊徳は、お米蔵を開けさせ、お手元金千両を授かり早速巡回・救急対策に当たりました。『二宮尊徳全集』には次の様な記述があります。「…即日出立登り筋へ懸り、宮ノ下村藤屋勘右衛門方へ止宿致し、同4日仙石原通り御厨へ罷越し、御殿場日野屋惣兵衛方宿致し…惣村数78カ村、…極難・中難・無難と三段に仕分け、夫食貸付、撫育取計り、夫より組合村々軒別廻村致し、4月24日藤曲村より世附村…」と。

飢えから救われた人々は感激し、その後報徳心の湧発によって報徳仕法を懇願し、指導を受けましたが、熱心で優れたリーダーのいた村は成果も挙がりました。今回は、この地方の報徳リーダー達の跡を訪ねてみました。

定刻8:15、小田原駅西口を出発、城山トンネルを抜け、1号国道を箱根に向かいました。途中湯本では福住正兄の萬翠楼、塔ノ沢では早野小八の弟喜平治の福住・一の湯と尊徳お馴染みの旅館前を過ぎ、目に染みる様な新緑の箱根路を早川の渓谷沿いに登って宮ノ下富士屋ホテル前までは30分もかかりませんでした。このホテルは、かつて「藤屋勘右衛門」の旅館があり、尊徳も宿泊したことはあまり知られてはいないようです。

ここでバスは1号国道と別れ、国道138号に入りました。そして、尊徳回村の順路に従って仙石原を通り御殿場に下りました。以下見学順に報告いたします。



◇御殿場愛郷報徳社コミュニティーセンター

伊倉社長・田代総務お二人に迎えられ、用意された資料とお茶を頂き、ご挨拶や当社の活動概況などを伺ってから施設見学(外の施設は雨のため窓から)。一同その充実ぶりに羨望の感を抱きながらじっくり見学。最後に、体育館で記念撮影(表紙写真)し、次の見学地へ向かいました。



見し、資料やお土産まで頂いてしまいました。

◇三井内蔵助家

天保7年二子村は多くの餓死者が出ました。組頭内蔵助は小林平兵衛に相談し、報徳こそ村を救うと考え、自ら質素倹約を实践、人々の心を開発を推すめしました。そして、たびたび尊徳を訪ね教えを受け、よい村づくりはよい家庭から、と考え女子教育に力を注ぎました。「おさんの寝言」はその一例ですが、同家では「報徳訓」「おさんの寝言」の版木や他の資料を拝見しながら、当主一郎氏のお話など伺がい、内蔵助が、尊徳の死を悼んで建立した「二宮先生詠」歌碑なども見学しました。



◇小林平兵衛家

天保の飢饉に際して、尊徳から受けた恩徳に強く感激した電新田村組頭の平兵衛は、心学だけで人々の困窮

は救えないと考え、尊徳の教えを受け、率先して報徳金を推譲したり、人々に教えを伝え、地域の報徳仕法推進のリーダーとして大変貢献しました。

同家では、一同座敷に上がって「報徳訓」掛軸をはじめ沢山の史料を奥様のお話を伺いながら拝

◇相続講碑(天王神社)

小林家から程近い国道246の西側の神社境内に明治45年に建てられた、いわば平兵衛の顕彰碑ともいえるもの。彼は同志18人で相続講を設立、毎日草鞋を縛った代金が、48文を積み立てて飢饉に備えたのでした。





◇昼食

結婚式場もある洒落た名鉄菜館で中華料理に舌鼓を打ちながら、おしゃべりで楽しい一時を過ごしました。

◇秩父宮記念公園(御別邸跡)

昭和天皇の直宮で、スポーツの宮様と呼ばれた殿下は、特に登山がお好きだったので、当御殿場にもよくお出になりこよなく愛され、昭和16年からの10年間は当御別邸で過ごされました。殿下の没後、ご遺言によって妃殿下はそっくり当市にご寄附されました。

園内には築250年の母屋と季節の花が多く咲き、折からの雨でしっとりとした雰囲気で、市民に親しまれた両殿下のお人柄が偲ばれました。



◇日野屋本店跡

秩父宮記念公園を出て藤曲へ向かう県道394号の途中に、豪商日野屋跡があります。天保8年3月尊徳はここを前進基地として、郷内の救急対策に奔走しました。当時の主人四代目山中兵右衛門は、当地の報徳仕法導入の発起人として尽力しました。主人の気持は奉公人にもよく浸透し、同店の推奨件数・金額とも抜群でした。

◇藤曲浅間神神の尊徳墓碑

天保8年、尊徳は名主鈴木平四郎家を拠点として、お手元金の配分や救援米代金の貸付けを行いました。又、同家は村民が尊徳の教えを受ける集会所にもなりました。

平四郎以下村民は恩恵に感謝し、総出で縄綱や山稼ぎなどに励み、集めた金を報徳金として差し出しました。

尊徳の没した翌安政4年10月、平四郎等村民は慶林寺境内に墓碑を建立、上部の円の中に「誠明院功誉報徳中正居士」と刻してあります。大正10年に八幡神社境内に移され、



昭和10年に現在地に移されました。

その八幡様の前を流れる「藤曲用水」は、慶林寺の耕雲和尚が托鉢をして自力で300間(540m)の隧道を穿って創ったもので、後尊徳の指導で改修されたとの説もあります。続いて慶林寺が建っていた場所を遠くに見ながら、尊徳の指導で作られたという郷倉の跡(現消防小屋)前でバスに戻りました。



◇大口「文命堤」

藩主大久保忠世は、大川をここで堰止め、現在の酒匂川の流路に変えましたが、宝永4年(1707)富士山の噴火で川床が上昇し、大洪水で堤も切れてしまいました。享保11年(1726)田中丘隅によって復旧され、黄河を始めた「禹」の古事にちなんで



「文命堤」と命名されたのだそうです。

堤上の福沢神社にはその記念碑が建てられています。

◇竹松(小芝原)の報徳堀

この辺りは湿田が多く、収穫も僅少だったので、名主河野幸内が天保11年尊徳に懇願、その指導によって近郷から多数の応援が出て、わずか4日間で、縦堀234間(423m)、横堀112間(202m)、どちらも幅2間(3.6m)、深さ1間(1.8m)の排水路が完成、二毛作が出来る田地となりました。現在、明治44年9月に竹松青年会により横堀の基点近くに石の碑が立てられていますが、雨足が激しくなったので、

車窓から場所だけの確認に止めて小田原へ向かいました。南足柄市塚原で甲州街道に出、昔尊徳が栢山と小田原の往返には必ず通ったであろう多古・井細田・寺町を通して、予定より大部早く小田原駅西口に到着し、解散しました。



報徳博物館だより

◇新着資料の紹介 山川永雅画「二宮金次郎」

馬を曳く少年の図柄は養老ノ滝や塩原太助などでも見かけますが、この少年は読書をしています。まぎれもなく「金次郎少年」を描いています。

やわらかく、温もりの感じられる絵ですが、描かれている白馬は、農耕馬としては、あまりにも立派過ぎると思います。

馬の背には薪ではなくこれは多分萱でしょう。この足柄地方では、屋根を葺くのに萱を多く用いましたが、久野山・矢佐芝など箱根明神岳の中腹辺りによく刈りに行ったようです。又、二宮家で馬を飼っていたかどうかは不明ですが、尊徳が桜町へ移る時に処分した家財道具類の中に飼い葉桶はありません。肥え桶まで記録していますから、あれば当然書いたであろうと思います。

作者の山川永雅(1878~1947)は、東京生まれ、佐竹永湖・小堀鞆音に師事、明治40年第1回文展で入選以来、文展・帝展で入選を重ね、後に帝展委員まで務めました。戦後、昭和21年の第1回日展に「春の岩国」を出品しましたが、翌年69歳で没しました。

◇職員が関係した講演会

- 7月15日(土) 加藤けんいち後援会主催
草山館長「報徳の教えと小田原」
- 6月4日(日) 湘南馬城クラブ主催
飯森学芸員「二宮尊徳と相馬」
- 5月9日(火) さがみ信金大井信和会主催
16日(火) さがみ信金いずみ信和会主宰
斎藤館長代理「二宮尊徳に学ぶ経営の精神」



◇留学研究員生の紹介

梁 暁菲さん(4月1日から半年間の留学研修予定)のメッセージです。

「4月1日に来日した中国上海華東理工大学修士課程の梁 暁菲です。「二宮尊徳の農政思想」を研



究するために、報徳博物館の研究員生として滞在いたしております。あっという間に日本での留学は半分の時間が過ぎました。この3ヶ月間、歌舞伎を見たり、各地を見学したり、日本料理を習ったり、報徳思想は勿論、日

本の文化もよりよく理解いたしております。そして、皆様からいろいろお世話になりまして、本当にありがとうございます。これから、また3ヶ月間もいろいろ体験していきたいです。ご指導の程宜しくお願いいたします。

梁さんには、もう、5月28日の「中国を知ろう会」で「中国南北の特色」を話してもらいました。

◇国際二宮尊徳思想学会第三回学術大会

基調講演、山折哲雄氏「危機における経済倫理-二宮尊徳の場合-」も決まり、着々と準備は進んでおります。

期日 8月5日(出発)~10日(帰国)

会場 大連民族学院

参加 現在申込受付数101名、中国側の期待人数はもう十分クリアしています。

◇友の会の現況報告 (3月31日現在)

維持会員(一口10万円以上)

法人会員 31件

この会費は賛助会費として全額を報徳博物館に寄付しております。

一般会員(会費3000円以上)

法人会員56件 個人会員207件

財団法人報徳運社の役員会でも、「みんなで増員をめざして努力しましょう」と意見が出ました。

発行 財団法人報徳福運社

報徳博物館友の会

〒250-0013 小田原市南町1-5-72

電話0465(23)1151・振替00250-6-24450